

トキ野生復帰にむけて 41

トキ放鳥後の情報収集にむけて

放鳥トキの行動等について、市民のみならずボランティアとして情報収集にご協力いただくことを目的とした環境省主催の「トキ・モニター養成講座」が3月15日、トキ交流会館で開催されました。

第1回目は、兵庫県立コウノトリ郷公園の大迫主任研究員からコウノトリモニタリングの事例を学びました。コウノトリの生息環境整備の取組みや、類似種との識別方法、行動記録の方法など詳細な資料を基に説明がありました。

コウノトリに小さな発信器をつけた衛星追跡では、コウノトリがいつ、どこにいるかは記録できませんが、何をしているか(採餌・休息・羽繕い)が分かれます。そのため、人の手による地上からの追跡がかかせません。具体的には、足に五色のカラーリングをつけ、双眼鏡などで個体判別できるほか、羽の一部を染色して飛翔している際に肉眼でも個体判別できるように工夫しているそうです。市民からの目撃情報の報告は、



メッシュ地図を記載したパンフレットなどを小・中学校や市外・県外の行政団体に配布し、電話、ファックス、郵送、メールなど、いろいろな方法で受付しているそうです。

講座はこの日の他に、2日間にわたって約50名の参加により開催され、トキのモニタリング方法などについて学びました。環境省では秋の試験放鳥にむけて、モニタリングの体制・方法について具体的に検討しているところです。

ドジョウ養殖助成事業

平成19年度中に野生復帰ステーションに納入されたドジョウはおよそ1,600kgにのぼります。そのうち島内産ドジョウは245kgと野生復帰ステーションに納入されたドジョウのおよそ15%を占めています。



野生復帰ステーションでは給餌棟からパイプを通して給餌(提供 佐渡トキ保護センター)

このように島内では、一部で先進的な取り組みが行われていますが、生産体制はまだ確立されていないのが現状です。市では島内での生産体制を確立するため「ドジョウ養殖助成事業」を平成18年度から実施しています。この事業は島内でのドジョウの生産体制の整備を図り、佐渡トキ保護センターや野生復帰ステーションへの供給ができるように、ドジョウ養殖を新規に始める農家や事業所に対して、資材費や工事費など必要経費の一部を助成するものです。

人工化技術の確立などまだ課題も多くありますが、市では県と連携して養殖技術の研修会を開催して養殖に取り組む方の支援をしています。この助成事業を希望される方、興味のある方は、トキ交流会館にお問い合わせください。

トキ交流会館

☎ 24・6040

トキ訓練の現場から③

「オープン1年、いろんな人が訪れました」

佐渡トキ保護センター野生復帰ステーション 井澤 正人

平成19年4月17日に野生復帰ステーションがオープンし、1年が経とうとしています。トキの移動や順化訓練の開始など、あわただしい1年でした。ステーションではトキの飼育・訓練が第1の業務ですが、施設の視察や見学の案内も大事な仕事になっています。業務に支障がない限り案内をしています。いろんな人が県内外から訪れました。国や県、市町村などの行政機関はもちろん、島内の集落や公民館、各種グループ・団体、小中学校、体験ツアー客、企業研修、大学のゼミ、シンポジウムのエクスカッションなどなど様々です。報道機関の取材や番組制作もあって、記事や番組をご覧になった方も大勢おられると思います。珍しいところでは、外国からのお客さま。トキ野生復帰の先輩、中国の陝西省野生動物保護協会さまが8月に来られました。日本からの中国トキの視察などでお世話になっています。つい先日には韓国の方13名さまが視察に来られました。韓国でも「トキ復活プロジェクト」の計画があるそうで、今後、中国や日本との連携を模索していくとのこと。



今年の秋には試験放鳥が予定されています。ますますの来訪者が予想されます。